

べたものではなく、その点では、一三九段の延長線上にあるといつてよい。

おわりに

一三九段の「家にありたき木」の価値基準が、兼好の思想に意味付けられたものであることは、これまでにも触れてきた。

兼好が、珍奇なものをめぐる精神を嫌悪したのは、ひとつに、珍奇な物自体を好まなかったことにもよるが、また一方では、物に執する心が、仏道精神と相容れぬものであったことにもよろう。珍奇な物に執することを排斥する意向は、「徒然草」の他の章段にも散在しており、兼好の思想の一つの核となっている。草木の論も、この思想を背景としているので、最後に草木を離れて、それらの章段を整理しておきたい。

第一〇段の「唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度」を並べ置くことへの批判は、第八一段の「持てる調度」も「珍らしからんとて、用なきことどもし添へ、わづらはしく好みなせるを」否定する精神と通う。「唐の物は、菓の外は、なくとも事缺くまじ。」とし、書経や老子の言葉を引き「遠き物を宝とせず」「得がたき貨を賈まず」とする第一二〇段も関連するし、「養ひ飼ふもの」として、「家にあたりた木」と同発想で執筆された、第一二一段も、最後に「凡そ珍らしき禽、あやしき獸、國に育はず」とこそ、文にも侍るなれ。」と、一三九段と同じ趣旨で結ぶ。

珍奇なものは、草木、鳥獸、調度などに限らない。例えば第一一六段では、寺院の号や人名にも及び、「この比」は、いたずらに聞き馴れぬ珍しい名称をつけると批難し、「何事も珍らしき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ。」と結ぶのである。一五四段の日野資朝が「手も足もねぢゆがみ」た不具の者を見て興つき、「たゞすなほに珍らしからぬ物にはしかず」と悟り、これまで大切にしてきた「異様に曲折」ある植木を皆掘りすてた話とも関連する。

その他、「獅子のたちやういとめづらし」と感動して失策を演じた聖海

上人の話（二三六段）なども、兼好のこの思想の網の目にすくいあげられたものと思う。兼好の求めたものは、「心のまま」なる姿、「すなほ」にして「ことごとくしくなく」「やすらか」なものであり、そのような物には高尚を示した。

一三九段も、兼好の、珍奇に執する心を嫌悪する思想に意味づけられたところの、家にありたき草木の具体相であったといえる。

このように、一三九段は、「徒然草」の基底となっている、この思想と、一〇段のごとき住居論などを、重ねあわせて読むとき、はじめて、この章段にこめられた兼好の心の變が鮮明となり、深い理解が可能となってくるのであろう。

以上、一三九段を中心に、兼好の草木嗜好の傾向とその意味を、「枕草子」や「玉勝間」のそれと比較しながら論及してきた。

注1 この言説は、直接には土屋文明氏の植物愛を契機として述べられたもの。同様な意見は、定家の草木愛に触れられた、安田章生氏も、「世を倦み、人間を厭う孤独な心が、ものいわぬ草木に深い親近感をいだくのは、不思議ではない。」（西行と定家—日本の抒情詩の源流—）と述べている。

2 桑原博史氏著「徒然草研究序説」収録の諸本対照一覽の翻刻による。

3 「笠間影印叢刊、30・31」による。

4 村井順氏「常縁本徒然草」による。

5 古典文学大系本「枕草子」の章段と本文による。他の諸本も適宜参照した。

6 古典文学大系本「源氏物語」による。

7 清水好子氏「枕草子の言葉の使い方」（解釈と鑑賞34・9）にも同意見がある。

8 永楽屋刊本を底本とした「本居宣長全集」（第一巻）（筑摩書房）による。

9 注4に同じ。

10 中川徳之助氏「兼好の人と思想」。

11 岩波文庫本による。

段の「世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。」の嗜好と重なってくる。

ここで、一三九段の草木を植えこんだ前栽を想像してみると、歌材となった植物が、とりどりに顔をみせるので、かなり多彩な感じを受ける。が、その多彩さは、例えば「源氏物語」(乙女)で、光源氏の住む六条院の有様を叙した、

みなみひんがしは、山たかく、春の花の木、敷をつくして、植ゑ、池のさま、ゆほびかに、面白くすぐれて、御前ちかき前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩鬪園などやうの春のもてあそびを、わざとは植ゑて、秋の前栽をば、むら／＼、ほのかにませたり。云々

の、はなやかさではない。植物の品種自体は重なっても、六条院の草木は、「敷をつくして植ゑ」「わざとは植ゑて」おり、兼好の嫌悪する植え込み方である。

一三九段を「家にありたき木」として、前栽に位置付けて想像するには、第一〇段を重ねあわせることによって、はじめて、兼好の理想とする前栽のイメージが映しだされてくる。

「撰集抄」(巻六の八話)に、永暦の頃、信濃の国を過ぎたとき見つけた庵について、「庵の内を見入侍れば、手折て庵につくれる草々に、紙にて札をつけたり」と、薄、かるかや、藤袴、萩、女郎花、萩などに、各々に札をつけて歌を記していたという。この草庵の秋草も、すべて一三九段の草に含まれている。一三九段の草木も、多分に遁世者の草庵の庭をも念頭においていたのかもしれない。

二三四段には、兼好の庵室を訪れた有宗入道が「この庭のいたづらにひろきこと、浅ましく、あるべからぬ事なり。」と注意した記事があるが、その庭には、どんな草木が植えこまれていたのであろうか。「いたづらにひろき」という指摘からすると、これといった草木は植えられていなかったのであらうか。

八

冒頭に引用した、上田三四二氏の隠者の植物愛の洞察は、土屋文明氏の植物に対する耽溺にちかい関心にことよせて述べられたものであるが、この引用文に先だち、「植物ほどロマンチズムに遠い存在はなく、それは情熱を瞑想に変え、行為を鑑照に導き、行動と対話の世界に傷ついた人間を、無言の生のやさしさをもって慰撫する。」との意見を述べている。

兼好の草木嗜好にも、この隠者的精神と脈絡をもつものがあるのかもしれないが、一三九段以外に、特に草木について論じた段はない。ただ、第一九段には、前栽の個々の草木としてではないが、いくつかの草花に言及したものがあつた。

ここでは、春の情趣で「のどやかなる日影に、牆根の草もえいづるところより」とするのは、一三九段の牆根と草との調和の場面と関連するし、「花橘は名にこそおへれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひすてがたきこと多し。」には、一三九段での梅や橘への好尚の内実、名前だけ列挙するだけに終っていた、山吹、藤の草花の具体的な賞美点が窺える。特に、すでに指摘したことだが、「灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに……」は、四月の若楓の賞美と重なる。その他、一九段では、あやしき家の白き夕顔、下葉色づく萩などがとりあげられているが、いずれも歌の世界と関連したものである。

また、月光に触れたところで、「ふかき山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなく哀なり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたること、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ。」(一三七段)などが、草木に関連する、最も印象深いところである。

要するに、「徒然草」には、色彩はなやかで豪華な草木花への好尚を述

きながら、草木花の美醜を論じたが、以上の比較のように、互に重なる面を有しつつも、各々に独自の見方も提示している。少し抽象的な要約を試みると、清女は、ある特定の価値基準を強く持って草木の嗜好を論じてはいない。勿論、濃き色を好む色彩感覚、草木の名称によせる関心、古典、特に支那文学と関連をもつ草木への興味、といった傾向はあるが、ある思想を背景とする、価値基準ではない。かなり自由な態度で列挙している。そこには、これまで伝統的に認められてきた草木花の美を一応容認しつつ、さらに珍しい草木花の新しい美の発見を、ほこらしく提示してゆく姿勢が一貫している。

これに対し兼好は、文末の「おほかた、何もめづらしく云々」に示したような、思想に興味付けられた価値基準によって、草木が選びとられていく。彼の目は、草木の視覚的な美より、古来の伝統が認めてきた、草木にまつわる情趣にそそがれている。一三九段の背後には、王朝的な美的理念を漸次に喪失してゆく「今やう」に対する、不満の気持もある。このあたりの事情をくんで、永積安明氏は、「その資質において、詩人であるよりは、いっそう思想家であるかのような兼好の側面が、この文章の背後にみられよう。」〔徒然草〕（日本古典文学全集、一三九段の評）とされ、三谷邦明氏は「同じ随筆文学と言われながら、枕草子では意味が隠されているのに対して、徒然草は、意味が露呈し、その意味に描写が従属させているわけで、ヤコブソンの言う隠喩と換喩の両極性が、枕草子と徒然草とを対照的にしていると言えるわけである。」〔徒然草講座〕（第三巻）第百三十七段、第百四十六段、鑑賞、と評している。

宣長の草木花は、兼好のように、思想に興味付けられた価値基準によって列挙されていない。そこには、宣長の、自然で純粹な心に映じた美しい花が、思いつくままに列挙されている。「そもくかくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ」と認め、個人差があるので「「やうにさだむべきわざにはあらず」と、自己の審美眼を他人に押しつけようとはしていない。

しかし、古歌などによまれたものでないと懐しからずと思う心を「ひとやうなるひがこゝろにやあらむ」と反省し、できるだけ先入観を排し、そのまま草木を観察しようとする。

が、この観察態度も、「つくりみやび」をきらい、「まことの情」を重視する思想が背後にあることはいうまでもない。「花のさだめ」も、その意味では宣長の思想に興味付けられているともいえるのであるが、結果的には、兼好のように確固たる価値基準を提示せず、自分の裸眼に、確かに美しいと思ったものを、素直に描写しようとする。努めている。

七

一三九段は住居論と関連をもつが、兼好が住居に関心をもっていたことは、第一〇段や一一段、五五段などにも窺える。

この世を仮りの宿りとし、無一物の境涯を理想的な生活と考える遍世者兼好にとって、かかる住居への関心は、いわば自家撞着でもある。彼はその矛盾をよく痛感したうえで、「家居のつきくしく、あらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ」（一〇段）と告白する。趣味人としての兼好の一面である。

兼好の住居論には「家の作りやうは、夏をむねとすべし」「天井の高きは、冬寒く、灯暗し。」（五五段）といった、建物の内部構造への提言もあるが、それらの章段よりも、一三九段とより関連を有するのは一〇段で、「よき人の、のどやかに住みなしたる」家居のさまがとかれ「今めかしくきらゝかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。」と、質素で自然なたたずまいを好む。従って「おほくの工の心をつくしみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせる」家居は、「見る目もくるしく、いとわびし」と批判される。これは、一三九

木)こきもみちのつやめきて」「(かへでの木)もえいでたる葉末のあかみて」「(蓮)みどりなる池の水に紅に咲きたる」「萩、いと色ふかう」といった調子である。「かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり」となると、色濃き花が好尚の条件であることを裏面から証している。

これに対し、兼好は草木を色彩面からとらえることは少ない。一三九段で色に触れるのは「梅は白き、うす紅梅」だけである。色彩に触れぬのは、この段が家にありたき草木の品種を列挙する意図で執筆されたことにも原因しているだろうが、「徒然草」全体を通して、色彩描写は少ない。あつても、色濃き、赤色系統でなく、白や黒の淡白なものに偏っている。

このように兼好は、草木の色彩に重点をおかず、奥にただよう、伝統をふまえた情趣的なものを中心にみる。それは、彼自身の言葉でいえば「なつかし」き草木への好尚である。

また、草木をとらえるのに特徴的なのは、草木それ自体を独立してみるのではなく、他の草木との関係や自然の時節などからめて品評していることである。例えば「遅ざくら、またすさまじ」とか「ひとへなるが疾く咲きたる」「おそき梅は、さくらに咲き合ひて覚えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、心うし」などにも、それが窺える。このような物象への観察は、「折節の移りかはるこそ、ものごと哀なれ」の段で代表される、時節の移り変りに、限りなき情趣をみいだし、各々の動植物や人事も、その自然の移り変りの情趣を支える要素としてとらえる、兼好の美的理念とも、大いに脈絡をもつだろう。

清女の方は、自然の推移や他の草木との調和関係で草木花を品評することに主眼はおいていない(時には、「龍膽は、枝さしなどもむつかしけれど、こど花どものみな種枯れたるに、いとほやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかじ。』などの、とを方もするが)。

調和といえば、一三九段は「家にありたき木」ということで、屋敷との

関係としてとらえているので、家の構造との調和にも留意されている。「たち花・かつら、いづれも木はものふり、大きなよし」も、第一〇段の住居論でいう、「今めかしくきらゝかならねど、木だちものふりて」と重なり、しっとり落着いた雰囲気求められる。草に対しては、「いづれもいと高からず、さゝやかなる壁に、繁からぬ、よし。」(ここは、安良岡氏の言われるように、「いと高からず、さゝやかなる、駒に繁からぬ、よし」とみるのがよろう)と、あまり丈高くなく、生い繁らないのを好んでいる。木はものふり、大きくてあるのをよしとするが、草と壁との調和も考えてのことだろう。

宣長の「花のさだめ」を、先のような視点からみると、一つの特色が鮮明となる。それは、同じ草木花を美醜の両面からとらえていることである。桜でいえば「桜は、山桜の、葉あかくてりて、ほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲たる」を最上のものとする一方、「葉青く、花のまばら」なるを「こよなくおくれたり」とする。梅も「ひらけさしたるほど」をめでたきと賞美するが、「さかりになるままにやうやうしらけゆきて」みどころがないとくたす。桃の花は「あまた咲つゞきたるを、速く見た」のはすばらしいが、「ちかくては、ひなびたり」とする。各々の花の美を絶対的なものとして論ずるのではなく、花の状況を考慮し、限定された瞬間の最上の美をみいだす。それだけに、清女や兼好の美感にはなかった、距離感とかバックの問題が美をとらえるポイントになっている。先の桃の花の遠近差による評価もその一つだが、桜の場合も「松も何も、あをやかにしげりたるこなたに咲るは、色はえて、ことに見ゆ、空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおほえぬまでなん、朝日はさら也、夕ばえも」と、松の緑や青空をバックにして、太陽の光をうけた山桜に最上の美をみとめている。かの著名な「敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜花」の美である。

兼好は「枕草子」を、宣長は「枕草子」「徒然草」を、各々に念頭に

次に梅は「梅は白き、うす紅梅。」と、白梅を第一に賞美し、紅梅は薄色のものに限って好むとする。これも清女の「こきもうすきも紅梅。」の好尚とは一致しない。「うす紅梅」だけは一致すると言えなくはないが、清女が「こきもうすきも紅梅」と言ったときと、兼好の「うす紅梅」とでは、ニュアンスの相違がある。即ち、清女は白梅よりも紅梅への嗜好を強調するために、「こきもうすきも」と許容したのであり、以下に続く、清女の、濃き色を好む美感覚からみても、やはり、濃き色の紅梅が第一なのであり、紅梅なら薄色のでもよいという気持が背後に流れているとみる。これに比較すると、白梅を第一とし、紅梅の場合は、薄色のものと限定した兼好の美意識とはニュアンスが相違する。(因に、「万葉集」の梅はその歌詞から、すべて白梅であったと推定されているが、日本で、紅梅が記録にみえるようになるのは九世紀の終り頃というから、清女の時代は、紅梅は新鮮で、ハイカラな品種であったのであろう。)

この清女の筆法は、「ひとへなるが疾く咲きたるも、かざなりたる紅梅の匂ひめでたきも、みなをかし。」という兼好のそれと近似する。「みなをかし」と中広く好む姿勢を示しているのは、梅のよさを強調するためで、あくまで、一重の白梅が早く咲いたのが最上なのであり、「かざなりたる紅梅」(八重咲きの紅梅)は、「疾く咲く」という条件に、さらに「匂ひめでたき」条件を必要とするのである。

続いて、

「ひとへなるが、まづ咲きて散りたるは、心疾く、をかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒ちかく植ゑられたりける。京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。

と、定家の一重の梅への好尚をひき、兼好の意見を確証付けてゆく。「吉野の花、左近の桜」と同じく、権威ある故人の美的情趣による自説の補強である。

なお、細川本と常縁本には「京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。」

の一文がないが、この事実を、村井順氏のように、ただちに「後人の筆にちがいない。」と考^註えるのは問題であり、当初からあったとみることも可能である。

また、先の「なほ」を「ソレデモヤハリ」と考え、その前提として「定家の歌風の絢爛・巧緻を八重梅の「匂ひめでたき」になぞらえ、そうした歌風の定家にして、「なほ」一重梅の鋭角的な美を称揚したと言うのではなからうか。」との理解も提出されているが、いささか穿ちすぎた見方ではなからうか。この「なほ」は「やはり」と解し、定家が常々「ひとへなるが、まづ咲きて散りたるは、心疾く、をかし」ともらしていたが、「やはり」その言説の通り、実際、軒近くにも一重梅を植えたと理解してよからう。

宣長は「梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞ、いとめでたき」と紅梅を好み、「白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり」と白梅をおとしめる。この点、兼好の白梅好みと一致しない。

以上、兼好、清女、宣長の三者が、共通して言及する、梅と桜に検討を加えてきたが、次には、この梅、桜をも含め、各々の草木のどんなところ、どんな姿に美醜をみいだしているか吟味してみたい。

六

清女は色彩感覚に極めて鋭敏である。草木花だけでなく、「枕草子」の美の把握の基底に、この色彩美がある。それは、三七段の「木の花は」の段に限っても「木の花は、こきもうすきも紅梅」「桜は、花びらおほきに、葉の色、こき」「藤の花は、しなひながく、色、こく、咲きたる」「橘の葉のこく、あをきに、花のいとしろ、う、咲きたる」といった調子で、徹底して色彩把握が目立つ。なかならず、濃き色を好み、葉色と花との色彩のコントラストを重視する。この濃き色、特に赤色系統好みは徹底しており、「たそぼの

しかもこの五葉松は、針形の葉が五個ずつ一所に叢生する点、八重桜のような状態も具有し、兼好が嫌悪しようなものなのである。即ち、松の中で五葉を強く好むのではなく、「松は五葉の松でもよいが、花は（八重桜ではこまる）一重桜が一番すばらしい」といったニュアンスをこめた表現として受けとるべきではなからうか。この意味で、「枕草子」(四〇段)の「花の木ならぬは、かへで。かつら。五葉。」と列挙したときの清女の五葉への賞美とは同列に扱えない(因に、三巻本以外の諸本も、列挙の順序は違っても「こえふ」がある)。

やがて「八重桜は奈良の都にのみありけるを、この比ぞ、世に多く成り侍るなる。」と書きはじめ、八重桜への嫌悪を述べる前提をつくる。この文の「ありけるを」は逆接の意とみてよいが、そこにこめた筆者の気持はどのようなものであろうか。この本文は、「この比」↓「今の世」(常・細)、「世に」↓「いつくにも」(常・細)などの異同があるが、主旨に変わりはない。これは諸注指摘するように、伊勢大輔の「いにしへの奈良の都の八重桜けふこゝのへに匂ひぬるかな」(詞花集・巻二)の歌を背景とすることは言うまでもない。昔は奈良にのみあった八重桜が、かかる伝統ある歌に意味付けられて存在することが肝心なのである。従って、「こちたき」八重桜が、昔は奈良の都にだけあって、我々の目に触れることもなくよかつたが、という気持ではなく、八重桜はやはり、奈良の都に咲いてはじめて、それ相当の情趣もあつたろうのに、この頃はやたらどこにも見受けらるほど多くなつてしまつた、といったニュアンスがこめられているのではなからうか。伊勢大輔のすばらしい和歌に詠せられた、奈良にのみあつた八重桜には、兼好はそれなりの情趣を認めている叙述とみる。「この比ぞ」(今の世)と強く提示したのは、「何事も古き世のみぞしたはしき。今様は無下にいやしくこそなりゆくめれ」(二二段)の延長線上にある、王朝的な美が喪失してゆく、今の世への批判がこめられているとみてとれよう。「吉野の花、左近の桜、皆一重にてこそあれ。」も八重桜嫌悪への一階梯

として用意されたもの。「吉野の花」は、古来、桜の名所として、和歌によみつがれてきた桜。「左近の桜」も内裏の紫宸殿という最も崇拜すべき場に植えられた桜。この二つの場の桜が、ともに一重桜であると強調するのは、自己の「花はひとへなる、よし。」の主張を、伝統的、権威なものとの一致でもって確信付けようとするレトリックであり、それは同時に、八重桜を拒否することに通う。

これだけの布石をおき、次に「八重桜は異様のものなり。いとちたくねおけたり。植ゑずともありなん。」とずばりといつてのける。八重桜を嫌悪するのは大胆な発言といえるが、その背後には、清女の八重桜好尚への批判があるのではなからうか。「枕草子」(三七段)の「木の花は」で「桜は、花びらおほきに、葉の色こきが枝ほそく咲きたる」とするが、この「花びらおほき」は、古典大系本や『枕草子全注釈』(田中重太郎)なども「花卉が大きくて」と解する。表記上では「大きに」でも「多きに」でも解せるが、「大きに」とするのは、「枕草子」(三巻本二一九段)の「大きにてよきもの」に「桜の花びら」をあげているのを根拠とするらしい。但し、「桜の花びら」をあげているのは三巻本に限る。沼波氏は『徒然草講話』で、この一文をおさえ、「清女の書いたのは確に八重桜の風情だ」とされる。「大きに」か「多きに」かはともかくとして、兼好は「枕草子」のこの部分を八重桜の風情と解していたのではなからうか。その意味で、兼好は清女を意識し、八重桜に別の見方を提示したともいえるのである。宣長の場合は、山桜を第一に珍重する一方、「今の世に、桐がやつ八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし。」と「やうかはりて」いふものまでも嗜好し、範圍が広い。兼好が「遅ざくら」(遅咲きの桜)を「すさまじ」とするのは虫のつくこともさることながら、主として時節はずれであることに原因している。花には各々、自然の節理にそつて咲く時期というものがあつて、その流れに調和するところに風情があるとの意見が背後にみえる。

ふめり。」と提示し、一応、「穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある」と賞美し、「秋のはてぞ、いと見どころなき。」と、詳しく状態をといて、薄を入れぬ理由を理解してもらおうとしている。

このような清女の草木嗜好を、兼好のそれと比較すると、著しい相違がある。珍しいもの、唐めいたものに興味を示さぬ兼好の好尚は、清女に対する無言の批判のようにも受けとれるのである。

宣長が「花のさだめ」で列挙した草木花は、桜・梅・桃・菊・つつじ・かいどう・山吹・かきつばた・撫子・萩・すすき・女郎花、などである。兼好のあげた草と比較すると、桃・つつじ・かいどう、が新しい程度で、他は重なる(松・柳・かへで・かつら、は花でないので除外)。こうみると、宣長の方が、「桃」と「かいどう」を除き、和歌に取材されてきたものを集中的にとりあげているが、かかる結果になったのは、当初から枠組をもって選択したのではなく、脳裡に想起される好きな花々を品評を加えながら記したところに生じたまでである。ただ、「花のさだめ」の末尾で、

いまやうの、よの人のもてはやすめる花どもも、よにおほかるを、かぞへいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらす、ふるき物にも、見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおほゆかし、されどそれはた、ひとやうなるひがこころにやあらむ。

と弁解しているの、歌材的な偏重になったことを、彼自身、充分に意識していた。

このように、宣長の嗜好は清女とは異質で、兼好の方により近似している。ただ、両者が相違しているのは、兼好の場合は、「庭にありたき木は」「草は」で筆をとったとき、まず、「世に稀なるもの」「唐めきたるもの」「見馴れぬもの」を拒絶するという枠組が強くあって、歌材的な世界の草木を多く列挙したのに対し、宣長は、脳裡に浮ぶ好きな花を列挙したところ、結果的に歌材的なものに集中していたということにある(勿論、宣

長の場合も、枠組は無意識的に作用しているわけではあるが)。「そも／＼かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ、人は又おもふことなすべきれば、一やうにさだむべきわざにはあらず」と自分の好尚を他に押しつけようとしている。また、「玉勝間」はじめ、随所に「漢意」(からごころ)への批判を強調しながら、「かいどうといふ物、からめきて、こまやかにうるはしき花也」と叙述するあたり、唐めくものにもこだわらず、自由に美しい花を列挙している。

宣長は、自分の好む草木花の美や情趣を根拠にして、ある思想を強く提示していない。その点は兼好の場合と相違する。宣長は「玉勝間」(巻四)の「兼好法師が詞のあげつらひ」で、「一三七段などの美意識や思想を、「つくり風流」だと痛烈に批判している。「花のさだめ」の執筆に際しても、一三九段をある程度意識したと思うが、草木花の品種自体は、相当に重なっており、特に兼好を批判する姿勢はもっていない。ただ、先に触れたように、結果は同じ傾向になっただけでも、その過程では相違していたのである。

五

次に、同じ草木でも、どんな品種に美や情趣を感じているか、この方面から吟味してみたい。特に、「徒然草」「枕草子」「玉勝間」の三著書が、共に取りあげて品評している、桜と梅を中心に扱う。

まず冒頭で、「家にありたき木は、松・さくら。」ときり出し、「松は五葉もよし。花はひとへなる、よし。」と記されたとき、「五葉」と「ひとへ(桜)」は、同じ評価として位置付けられていないと思われる。兼好は八重桜を「こちたくねぢけたり」と嫌悪しているが、これを念頭におくと、「花はひとへなる、よし。」には、桜の花のなかでは一重が一番よい、という気持があるが、「松は五葉もよし。」は「も」に示されているように、普通の松のよさが前提にあり「五葉松もよいものだ」と追加された記述である。

以上のように兼好の好尚の前栽の草木は、伝統的に定着してきた歌材であり、平安朝的な前栽美の憧憬ともかかわっていたとみてよからう。

ただ、「卯月ばかりのわかかへで」に「萬の花・紅葉にもまさりてめでたきものなり。」と最高の「めでたき」を認めているのが、「かへで」が歌材として定着していないので、いささか気になるのである。安良岡康作氏も「かく、楓の若葉のみずみずしい美しさを賞揚しているのは、兼好の独自の観察と言われよう。」（『徒然草全注釈下巻』）と評されているが、確かに大胆な評価であり、兼好に確固たる体験による美の自覚があったことを示唆する。「枕草子」（四〇段）の三巻本では「花の木ならぬは、かへで。かつら。五葉。」と、トップにもってきているが、これは、他の能因本・堺本・前田本にござって「かへで」がないので、本来あったのか疑問である。その後では、「かへでの木のささやかなるに、もえいでたる葉末のあかみて、おなじかたにひろごりたる、葉のさま、花も、いと物はかながらに、蟲などの乾れたるに似てをかし」と、いささか複雑な評価をくだす。「若かへで」に情趣をみいだしているのは「源氏物語」にあり、「胡蝶」の巻の「雨のうち降りたる名残の、いと物濕やかなる夕つかた、御まへの若楓・かしは木などの、青やかに繁りあひたるが、何となく心ちよげなる空を、見いだし給ひて」とか、「柏木」の巻の、「おまへの木立ども、思ふ事なげなる気色を見給ふも、いと、物あはれなり。柏木と楓との、物より、けに、若やかなる色して、枝さしかはしたるを」にも窺える。兼好が特に「若楓」に「めでたき」をみたのには、かかる「源氏物語」の世界に媒体されていたのかもしれないが、また、一九段で、ある人の言として、「灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」とひき、「げに、さるものなれ」と共感しているのも参考となる。

四

「枕草子」の「木の花は」「花の木ならぬは」「草は」「草の花は」の四つの草木花の諸段と一三九段を比較すると、兼好のとりあげたものは大部分、「枕草子」の各段の最初の方にとりあげたものばかりで、結局、木では柳、草では杜若、荻、藤袴、しをに、われもかう、つた、などがみえない程度である。ちなみに四つの段でとりあげた草木花はすべて六〇種にわたる。

清女の列挙しているのは、梅、桜、女郎花、撫子など、伝統的な歌材もあるが、むしろ、それ以外の珍しい、見馴れぬ草木花を多彩に評定しているところに一大特色をもつ。例えば「木の花」の段で、和歌に取材されない、「梨の花」「桐の花」などに目をつけ、「長恨歌」に「梨花一枝春帯雨」とか、桐の木には鳳凰の鳥が住む、といった、漢詩や故事と関連付け、特異な観察や品評を行っているのである。柏木を「葉守の神」、蓮葉を「妙法蓮華経」、楠木が「千枝にわかれて恋する人のためし」、桧の木を「催馬楽」と関連付けてみるのは、この系列に属する。草木を彼女自身の裸眼で凝視し、そこに美を発見する前に、和歌、歌謡、漢詩、故事との関連で情趣をみいだそうとする姿勢である。

また棟の花が「五月五日にあふもをかし」とか、おもだかを「名のをかしきなり」と、名称に興味を示した草木も、かまかつの花、あやふ草、いつまで草、ことなし草、しのお草、やどり木、あすはひの木、ねずもちの木、などはじめ、他にも多い。名称による興味であるだけに、列挙されたものは目馴れぬ、唐めいたものが多く、彼女自身、実物を観察していたかどうか疑わしいものもある。ただ、特異な観察や常識を打ち破った、人の意表をつく品評を行っている清女でも、同時代の価値基準に対しては、それをあまり逸脱しないように気をつかっている。例えば、草の花のなかに薄を入れなかったことに対し「これに薄を入れぬ、いみじうあやしと人い

ところであろうが、また半面は韜晦であり、自分なりの理念に即した美を提示している自負の念はあくまで底流していたであろう。

一三九段は、これに対し「枕草子」には一言も触れていないが、文体をあえて模倣することで、読者に「枕草子」を強く意識させ、清少納言の草木嗜好と対比させる姿勢で執筆されているのではないか。文体と題材を同じくするとき、新しい見解はもはやその理念にうらづけられた嗜好性の相違以外にはありえない。兼好は文体を模倣することで、逆に「枕草子」との嗜好の異質性、同質性をきわだたせようとしているかのようである。その際、両者を比較し「清少納言の趣味は廣く、感受性が強く鮮かで、兼好のこゝの筆は甚だ見すばらしく覚える。それに書き方を真似てゐるので殊にそれが目立つ。」(沼波瓊音『徒然草講話』)と見るのは、一面的な見方であり、むしろ、両者の草木好尚そのものの異同を詳細に吟味することが肝要であろう。

なお、この段を「枕草子」や「玉勝間」と比較するとき、同じ草木の嗜好を論じてはいるが、「徒然草」の場合は「家にありたき木は」と住居との関連、調和でとらえるという枠組が前もって設定されていることに留意せねばならない。それは「木」だけでなく、「池には蓮」とか「さゝやかなる牆に」などによっても、後半の「草は」にも及ぶ。この点「枕草子」や「玉勝間」は、そのような枠組の設定せず、自由に草木花の好尚を述べている。

三

まず、一三九段の草木を木と草に分けて列挙し、その傾向をみる。

木↓松・さくら・梅・柳・かへで・橘・かつら

草↓山吹・藤・杜若・撫子・蓮・萩・薄・きちかう・萩・女郎花・藤袴・しをに・われもかう・かるかや・りんだう・菊・つた・くず・

朝顔

一見して明らかのように、ここに列挙したものには見馴れない草木はない。庭園や野原に足を踏み入れれば、どこにでもごく普通にみられる植物ばかりである。「この外の、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。」の意見に一致している。

ただ、どこにでもごく普通にみられる草木という言い方は適切でない。普通に見える草木なら、例えば、桃、辛夷、椿、杉、栗、桐、棕櫚、牡丹、露草、百合、水仙など枚挙にいとまないが、それらは取りあげていない。兼好がここで特に列挙したのは、ごく普通に見馴れる草木のうち、「古今集」以来、和歌の世界の歌材として定着してきた草木を中心にして、いるといいかえねばならない。

今、「古今集」「新古今集」の二勅撰集の歌材と合せてみると、「かへで」「かつら」(月の桂はある)、「杜若」(折句にはある)、「きちかう」「しをに」「われもかう」「りんだう」を除き、他はすべて歌材となっている。さらに、「古今集」の物名には「かつら」「きちかう」「しをに」「りうたん」などが取材されているので、これを入れると、ほとんどが歌材といえる。

さらにこれを百首歌の世界でみれば「堀川百首」の歌題との重なるの多さが注目される。兼好が「堀川百首」を熟読していたことは、二六段の書名引用や「堀川百首」の歌を引用していることでも裏付けられるが、歌題の一致するものは「松・梅・柳・桜・杜若・藤花(朝顔)・菊」の多きにわたる。しかも、これは、勅撰集のように散発的に詠出されたのではなく、歌題としてとりあげている点が重要で、これまであまり歌材とされなかった、杜若・苺・蘭・榎花は注意される。その点、兼好の嗜好の草木は「堀川百首」の草木花の世界と近似するとみてよい。

池田龜鑑氏が『紫式部日記考証』で、平安朝時代の前裁合の類を整理して、普通の前裁の草二一種を列挙されているが、このうち、兼好の嗜好する草一九種のうち、一四種までが一致する。

(8) 京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりのわかかへで、すべて萬の花・紅葉にもまさりてめでたきものなり。たち花・かつら、いづれも木はものふり、大きなよし。

草は、山吹・藤・杜若・撫子。池には蓮。秋の草は萩・薄・きちかう・萩・女郎花・藤袴・しをに・われもかう・かるかや・りんどう・菊。黄菊も。つた・くず・朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる牆に、繁からぬ、よし。この外の、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞(き)にく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。

おほかた、何もめづらしくありがたき物は、よからぬ人のもて興ずる物なり。さやうのもの、なくてありなん。

(校異) (細) 一伝細川幽斎筆本(吉田幸一氏蔵) ^{註2}

(正) 一正徹自筆本(静嘉堂文庫蔵) ^{註3}

(常) 一伝常縁筆本(上冊は村井順氏蔵、下冊は不明) ^{註4}

(1)のみ一のみ(細)、(2)この比ぞ世に多く成り侍るなる一今の世には(い)づくにもおほく成侍なり(細)、今の世にそいづくにも多くなり侍る(常)、(3)こちたくねぢけたり一ねぢけたちたし(細)、ねぢけこちたし(常)、(4)また一いと(細・常)、(5)かさなりたる一かさなり(常)、(6)枝に一はては枝に(細・常)、(7)心うし一心さし(細)、(8)京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり一ナシ(細・常)、(9)わかかへで一わかかへては(細・正)、(10)山吹・藤・杜若・撫子。池には蓮。秋の草は萩・薄・きちかう・萩・女郎花・藤袴・しをに・われもかう・かるかや・りんどう・菊。黄菊も。つた・くず・朝顔、一萩冬藤かきつはた女良花ふちはかまわれもかうかるかやりうたむ菊蒿くすあさかは(常)、(11)きちかう一きちやう(正)、(12)りんどう一りうたん(細・常)、(13)聞きにく一きにく(細・常)、(14)いと一ナシ(常)

二

一三九段の前段は祭のあとの葵の処置に関する所見、さらにその前段は、著名な「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」の段であ

る。

この三段の関連をみると、一三七段で「何となく葵かけわたしてなまめかしきに」と賀茂の祭見物の様子が描写されるので、続く一三八段で「葵」の話題を出した。その際「枕草子にも『来しかた恋しき物、枯れたる葵』と引用しているので、一三九段で「枕草子」の草木花に言及した諸段を念頭において、草木嗜好を記した。いわば、この三段は、前段の話題を受けて、連想的に配列されているとみられる。(ただし、常縁本は、一三八と一三九は隣接するが、一三七段は両段と離れている。)

このように、一三九段が、一三八段の連想で、「枕草子」の三七段「木の花は」、四〇段「花の木ならぬは」、六六段「草は」、六七段「草の花は」の諸段を意識して執筆していることは、諸注の指摘するとうりである。

その類似は、まず「枕草子」の文体を意識的に模倣していることにある。「家にありたき木は、松・さくら。松は五葉もよし。花はひとへなる、よし」とか「梅は白き、うす紅梅」などは、「枕草子」の「木の花は、こきもうすきも紅梅。桜は花びらおほきに、葉の色ときが、枝ほそく咲きたる。」(三七段)、「草の花は、なでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。」(六七段)の冒頭文の模倣である。「りんどう・菊。黄菊も。」の調子にいたっては「枕草子」の列挙章段の筆法をそのまま移している。

兼好はその主題にそって文体を自在に変化させる筆力を持っているが、「枕草子」を意識せざるをえない題材をとりあげながら、あえて「枕草子」の文体を模倣したのは、何を意味するのであろう。「徒然草」には、「枕草子」と類似する題材を扱った章段がいくつもあるが、一九段「折節の移りかはるこそ」などはその最たるもので、そのところを兼好は「言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。おほしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かつ破りすつべきものなれば、人に見るべきものにあらず。」と心情を吐露する。この気持は一面、正直な

「徒然草」の草木をめぐる(上)

稲田利徳

隠者たちが植物を愛するのは、植物が自然と人間とのあいだにあって人間にもとよく、自然の荒涼さからも免れている生のミニマムであるからだ。この極小の生のなかに、隠者は自己の生にたいする最後の執着を確保する。植物さえ愛し得ないとき、彼は絶望から自殺するだろう。(上田三四二「現代歌人論」^{註1})

はじめに

この論考は大きく二つの問題の考察を企図する。二つの問題は、ある意味において、互に乖離しているので、本来、別個に処理すべき性格のものかもしれない。

即ち、一つは「徒然草」一三九段の「家にありたき木は」の段を中心に、兼好の草木に対する嗜好を吟味することであり、他の一つは、「徒然草」の諸段にあらわれる草木を構想とのかかわりから、筆者の表現意図とからめて論及せんとするものである。前者が兼好の趣味や思想と関連するのに対し、後者は「徒然草」各段の構想や虚構性など——いわば創作態度とかかわりをもつてくる点、互に次元を異にするといえる。

しかし、二つの問題は、草木を論ずることでは接点をもっていて、互に関連を有する面もあるので、ここに、前編、後編として一括して考察してゆきたい。

〈前編〉

一

「徒然草」一三九段は「家にありたき木は、松・さくら。」と書きだし、庭園に植えおきたい草木を簡単な品評を加えながら列挙した段である。

この段における兼好の草木の嗜好を詳細に吟味し、彼の好みの傾向をつかみ、それが彼の思想とどのようにかわつてくるかを論じたい。ただ、その際、「徒然草」だけでなく、兼好が執筆に際して意識した「枕草子」の草木花に関する諸段と比較して、兼好の嗜好の傾向をより鮮明にした。さらに、「枕草子」「徒然草」を共に念頭に置いて執筆した、本居宣長の「玉勝間」(巻六)の「花のさぞめ」とも比較する。この場合は、後代の作品なので兼好の関与せざるところだが、一読者の享受反応によって、逆に兼好の嗜好の一面が映発されることもありうると思われるからである。

まず、一三九段の原文を「日本古典文学大系本」(慶長十八年刊、鳥丸光広本系)で引用し、後におもな諸本との異同を記す。

家にありたき木は、松・さくら。(1) 松は五葉もよし。花はひとへなる、よし。八重桜は奈良の都にのみありけるを、この比ぞ、世に多く成り待るなる。吉野の花、左近の桜、皆一重にてこそあれ。(2) 八重桜は異様のものなり。いとこちたくねおけたり。植ゑずともありなん。遅ざくら、またすさまじ。(4) 蟲のつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅。ひとへなるが疾く咲きたるも、かさなりたる紅梅の匂ひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、さくらに咲き合ひて、覺えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、心うし。(7) 「ひとへなるが、まつ咲きて散りたるは、心疾く、をかし。」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒ちかく植ゑられたりける。